



学校法人
鎌倉女子大学

ベトナム訪問記

この11月21日（水）から25日（日）にかけて、初めてハノイ市を訪問する機会を得ました。

この話には前段があり、「日本留学（高度人材・実践人材）フェア（ベトナム）」が6月ホーチミン市とハノイ市で開催され、家政学部の中谷教授と児童学部の小泉教授が両市を訪れ、会場にブースを構えたところ、初めての参加であったにも拘わらず、ホーチミン市で37人、ハノイ市で55人、計92人の本学に関心を寄せる留学希望者が訪ねてくれたということがありました。

ハノイ国家大学に日本語学科が開設され、既に40年ほどが経過し、ベトナムの学生たちの日本語運用能力は、日本の大学で勉強するに十分耐え得るレベルに達していると聞きます。現在、日本語学科をもつ大学は、首都ハノイ、南部ホーチミン、中部ダナンなど全土に14大学、日本へ留学している学生は、約4,000人（大学院・大学・短大・専門学校他）を数えます。

お蔭様で本学は、毎年入試も好調で、各学科大変高い倍率を誇っていて、むしろあまり高い倍率に懸念をもつ向きもあり、何もこの上ベトナムの留学生を迎え入れる計画などと訝る人もいるのかも知れませんが、しかし将来の東南アジアが具える社会的・経済的実力を考えると、今から交流の種を播いておきたいという気持ちが私の中にはあるのです。また、特にベトナムとの交流を私が望むのは、歴史的に親日的な国民性ということから、一つはもっとこの地域に日本文化を紹介していきたいと思うこと、一つは日本で培った修学の成果をベトナムの発展に役立ててほしいと思うこと、一つは3・11以降、もう一度私たち日本人も自分たちの培ってきた善きものを記憶の底から手繰り寄せ、より堅固な国づくりをしていかななくてはならない岐路に立たされているわけですから、新しい国づくりに取り組んでいるベトナムの若者たちの姿はきっと私たち日本人にもいい刺激を与えてくれるに違いないと思ったからです。

ただ、いざベトナムとの交流プログラムを構想する段になりますと、いろいろ情報収集には努めたものの、本学にはまだルートが開設されているわけではなく、そこで私のベトナム人の旧友のファム・フィー・ゴドム氏に相談したところ、氏の叔父上が日本語学科をもつタンロン大学の副理事長を務めていることを聞かされ、渡りに舟と、間を取りもってもらうことにしたわけです。

この過程で、ファム・フィー家がゴドム氏で49代を数えるベトナムの名家ということも知りました。何でも、蒙古襲来を撃ち破ったのは、日本とベトナムだけで、その時全軍を指揮したベトナムの武将が氏の25代前のご先祖だそうで、また氏の伯父上は、哲学者

で愛国詩人、故ホーチミン大統領の側近中の側近、市内にはその名を冠した通りが遺される英雄であることも判りました。

また、偶然は重なるもので、これも私の旧友の谷崎泰明氏がたまたま現在ベトナム駐在特命全権大使で、谷崎氏もいいアドバイスをして下さり、今回の訪問には大きな手ごたえを感じて帰ることが出来ました。何よりの収穫は、直接行かなければ獲られない交流の輪を広げることが出来たことです。

私たちの世代は、ベトナムというと、戦争、ハノイといえば、北爆といった記憶が強く残るところですが、街を歩く限り、そのような残像は全く感じられません。むしろ、フランス統治時代に設えられた小パリを思わせるサクというアカシア種の並木とコロニアル風の建物、これに加わる道路やビルの建設、そしてアジアの喧噪が混じり合った活気溢れる都市に変貌していました。

同行した長岡君とハノイ貿易大学の廊下を歩いていた時、熱心な眼差しで授業を聴いていた学生たちの中でたった一人だけ居眠りをしていた隣の友人を、私たちの姿を見るや、恥ずかしそうにそとつつき起こす女子学生の様子にむしろ健気な倫理性を感じましたし、タンロン大学の玄関ホールに飾られたモニュメントに刻まれた故ホーチミン大統領が愛した言葉が生太先生の「百年を思う者は人を育てる」と同様の趣旨であったことも印象的でした。初めは、一人、二人の留学生かも知れません。しかし、更に学术交流も深めたいと聞きます。将来、この種がどのように育っていくか、楽しみなことです。

[>前のページへ戻る](#)